道徳思想と高齢者福祉
― 介護福祉教育における課題 ―

守　屋　真　季，内　田　富美江

Ethical Awareness and Senior Citizen Welfare
― Challenges in Care and Welfare Education ―

Maki MORIYA and Fumie UCHIDA

キーワード：倫理，道徳思想，介護福祉教育，高齢者福祉

概　　要

道徳的観点から日本の高齢者福祉のあり方を考察し，その上で，介護福祉教育に対する課題と方向性を明確にすることを目的とした．

現在，高齢者福祉分野にかかわりが深いと考えられる道徳思想は，高齢者や親とのあたたかい感情を基礎にした考え方である「敬老」や「孝」の思想に加え，血縁関係が希薄な人々あるいは血縁関係にない人にまで及ぼした，論語のいう「仁」の思想である．

介護現場で中心的役割を担う介護福祉士には，人格論的な道徳の視点も必要とされるが，現在の介護福祉教育において徳育の機会は特に設けられていない．今後，介護福祉教育において，どのように道徳と福祉実践の関連を教授していくかは，質の高い介護福祉士の養成上，重要な課題といえる．

1．緒　　言

現在，日本の高齢者福祉分野においては，介護保険制度をはじめとして多くの施策が出されている．これらの施策は高齢者福祉の一つの条件になっていて大いに奨励されるべきだが，「イエ制度」の時代を生きてきた高齢者世代をはじめ，すべての人間にとって，本当の意味での福祉を追求するには肝心な何かが欠けているように思われる．

施策だけでは決して解決することのできないもの－それは，古今東西を問わず人間社会の普遍的な原理である道徳思想ではないだろうか．親や高齢者を大切にするという道徳は，人間として最も尊いものであり，時代が変遷しても人間がなすべき根本的な事柄はいつになっても決して変わることはない．

あらゆる介護現場において，その中心的役割を担っている介護福祉士には，人格論的な道徳という視点も必要とされるが，現在の介護福祉教育において徳育の機会は特に設けられていない．よって，関連する専門科目の中で，道徳と高齢者福祉の関連をどのように教授し，実践につなげていくかは今後の重要な課題であり，介護福祉士の質の向上を図っていく上において必要なことといえる．

本稿では，道徳的観点から高齢者福祉のあり方について考察し，その上で，介護福祉教育に対する課題と今後の方向性について明確にすることを目的とした．

2．道徳の位置づけ

1）倫理との関連性

はじめに，道徳を語る上において，非常にかかわりの深い倫理との関係を明確化しておくことにする．

日常生活において，人間は常に他人とかかわりを持ちながら生活している．人間というものはいつでもその人間的，人間らしさをよい方向に保とうとする傾向がある．そして，その中から「倫理」という考えが生まれてくる．倫理とは，「こうするべきである」とか「こうしなければならない」ということだけで決まっているわけでなく，生活それ自体で動いているもので

（平成18年9月28日受理）
川崎医療短期大学　介護福祉科
Department of Care Work, Kawasaki College of Allied Health Professions

ある．

よって，倫理そのものは，「人の生き方」，「人間のあり方」を意味するものといえる．

倫理は人間論である．人間はもともと価値判断を持っていて，判断の中に「いいものとは何か」，「幸福でない状態とは何か」などを全部判断しているわけである．したがって，その善か悪かを決めていく価値判断は，倫理的判断を意味している．

山口[1]は，「倫理学とは道徳的原理をその考察の対象とするものであるから，倫理学が直接に具体的にどういう行為をせよと示すことは出来ない．それ故，善い行為とはその道徳的原理に従った行為であると言う以外にはない．」と述べ，倫理の位置づけをはっきりさせている．

ところで，「倫理」（及び「倫理学」）という用語は，主として明治以来，ヨーロッパ語の ethics（英），ethique（仏），Ethik（独）の訳語として使用されてきた．これらのヨーロッパ語の語源はギリシャア語の ethos という語であり，この語は「自分自身の住み慣れた場所」というような意味から転じて，他と区別される個人や集団の「特有の雰囲気」や「性格」，さらには「慣習」，「習俗」を包意する用語として用いられた[2]．

「倫」という漢字は，元来「なかま」を意味している．今日でも「精力絶倫」（力が仲間の水準を超えて優れている）という表現にも「倫」の古来の意味は生きている．この「なかま」というのは「仲間」と表記されるように，「人々の中にあって同時に間柄にある人」を意味しており，「倫」は「人倫」と同義とみなすことができる．

一方，「理」は，「物事の筋道を立てる」ことで，「理の当然」といわれているように，事柄の道理や真理を指している[3]．

佐藤[4]は，「もともとは文字の示すように玉の筋目・模様のことであり，それが転じて，たとえば肌理（きめ）というように一般に物の様子・模様をさすようになり，さらに抽象的にものごとの筋道・道理をいうにいたったまでのことである．とすれば，「倫」の「理」である「倫理」とは，人間模様とか世間風景とでもいうべき，いたって弾力のある意味であった」と述べている．

倫理は，人間関係をいかに生きるべきかを探求するものであることが一層理解できる．

次に，倫理を道徳との語義的関連から見ると，同じくヨーロッパ語の moral（morality）（英），morale（仏），Moral（Moralit ät）の訳語は「道徳」であり，これらヨーロッパ語の共通の語源はラテン語の mores（mos）である．この語源がギリシャア語の ethos とほとんど同じ意味で使われたことは，例えば次のキケロ（Cicero, 106～43B.C.）が示す通りである．「われわれがモーレスと呼んでいるものを，彼ら（ギリシャア人）はエートスと呼んでいる．」（キケロ『運命について』）[5]

倫理の語源であるエートスがラテン語にはなかったため，キケロは習俗や行状を表わす mos, mores（複）から moralia をもって倫理に当たるものと考えた．この moralia は Moral（道徳）と一般に訳され，倫理の姉妹概念になっている[6]．

以上のような語源の意味が示すように，「倫理」と「道徳」とは同義語として欧米ではほとんど区別されないで用いられてきた．また，日本語の由来する漢語の原義からいっても，両者を強いて区別して使用する理由はないと考えられる．

2）道徳の語義的意味とその必要性

まずは，道徳の語義的意味を明確にしておく．

道徳という字の「道」の字義は，説文に，「行く所の道なり，辵（ちゃく）と，首（かしら）に従ふ，一達之を道といふとある．首はカシラにして首たる道は即ち一筋の大道にして，本道筋のミチである．即ち四達を衢（く）といひ，一達を道といふのである．辵（ちゃく）は行くといふ字であるから，道は人の行く所である．又人の行ふ所を道といひ，道徳と用ふる．轉（てん）じて道理又履行の理義，教法，学問，原理等の義にも用ふる」[7]とある．

また，「徳」は，窮屈に解さなければ「得」に通じて（江戸時代までは「徳」と「得」は相通じて用いられた），つまりは「そのもののプラスの面」，「人間の人間らしい長所」という程の意味と解してよく，「徳」は何よりもまず人間固有のことである社会の形成－つまり「倫」だといってもよい[8]．

道徳は人の行うべき正しい「道」を，客観的には法に従って，主観的には良心にてらして，実行し，自らの人格においてそれを体得してゆく生き方を示している[9]．

次に道徳の必要性について考察する．

倫理学の真の創始者といわれるソクラテスが，道徳の問題は他人事ではない．ウロウロ外を見まわすよりも，まず自分自身をみつめろ，と説き，また，カントが，道徳とはまず自分自身に対する責任であり，自由である．道徳はあくまでも自分の問題である．自分の

行為を通して自分をいかすことが道徳なのだ，と説いていることからもわかるように，道徳とは，この自分の自覚であり信念であり行為である.「われは何をなすべきか」も，まさに，このわれが何をなすべきか，ということなのである[10].

道徳は，人間の思想・信条にかかわるもので，人間が生きていく上で基本的に重要なものである．また，個人の内面的なものであり，規範として一般に承認されたものである．個人は社会の構成員の一人として存在し，個人の持つ道徳が社会的という人間の視点で深くかかわる．道徳は，個人的な認識を問うものであるが，社会的な形成をなす上で重要な規範となるものである[11].

倫理と道徳について，その語源からは，ほぼ同義とみなされていたが，細かくみれば（図１）に示すように，倫理の方が広い人間論であり，その中の位置づけとして道徳があるということになる．倫理のない道徳はないし，道徳だけで倫理は語ることができない．道徳の生まれない倫理はない.

「道徳」は「倫理」と並行して用いられてきているが,「倫理」が人間の仲間関係の秩序に向かっているのに対し,「道徳」の方は，元来は個々人の生き方つまり「有徳の道」であった[12]．とその関連性をまとめることができる.

本稿にそって考えた場合，福祉自体が倫理＝人の生き方，人間のあり方を示すものであるため，福祉実践も倫理の発展における枠組の中で動いているという価値実現の問題であるということになる．普通の福祉実践自体が人生論の中の一部であるので，人生の中での人格論的な道徳がどのような意味を持つのかということが人々に納得されれば，論理的に福祉実践の中でも意味をなすものと思われる.

３．高齢者福祉に必要とされる道徳思想

ここでは，特に福祉実践においてかかわりが深いと思われる道徳思想を取り上げてみる.

１）「敬老」思想

まずは,「敬老」思想である.

「敬老」とは，字のごとく「長年生きてきて年をとった者，一方では死に近づいている者に対して，うやまい，つつしむ」ということである.

高齢者がなぜ尊敬の対象となったのかということは，高齢者は長年生きてきた者であり，その積み重ねられた豊富な知識と経験，優れた知恵を持つものとして尊敬され，重宝される存在にあった．例え「敬老」を逆説的に強調するように思える習俗（食老，殺老，棄老）があったとしても，それは高齢者に対する最後の威信の証拠であり，名誉なことであったといえる．また，未開社会の風習や儀礼や制度の要請から生まれる社会の期待などに高齢者が巧みに適応するところに敬老的地位を保持し得たとまとめることができる.

ところで，日本の「敬老」思想は仏教の影響を強く受けているが，主に「礼記」などの儒教思想の影響が最も大きいといわれる．儒教の「孝」思想が敬神崇祖の観念に一致するところから「敬老」思想が発達した[13]．その後，古代，中世，近代と世の中が移り変わっても，高齢者を敬うことが一つの道徳観念として養われていた.

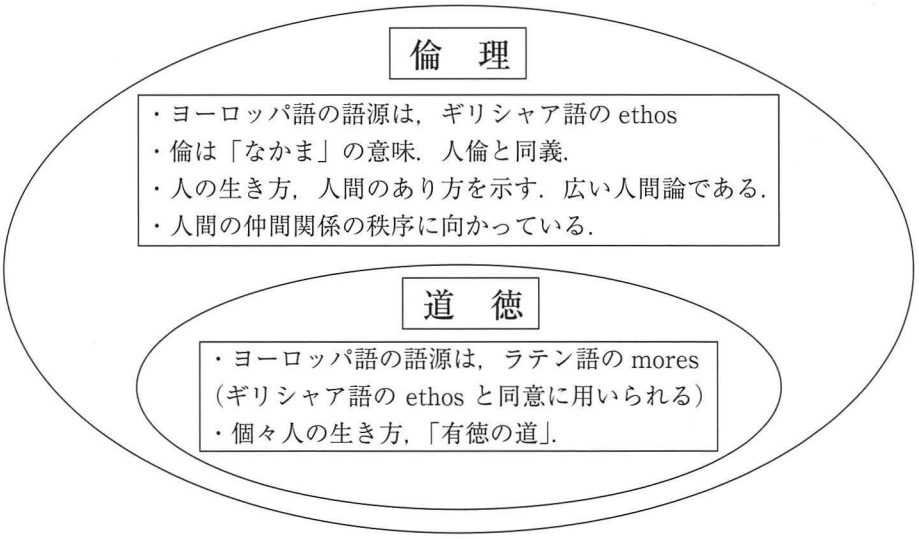

図１　「道徳」の位置づけ

しかし，戦後，旧民法から新民法に移行することにより家父長権のもとに従属し，絶対服従・無権利であった「イエ制度」も，高齢者の地位を認める「隠居制度」も廃止された．その結果，核家族化の影響で家族内人間関係も変化し，自由と平等を基盤に家父長権は喪失し，高齢者の座も不安定なものになった[14]．

しかし，1963年に制定された老人福祉法の第2条には，「老人は，多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として，かつ，豊富な知識と経験を有する者として敬愛されるとともに，生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする」と規定されている．

第2条は，高齢者福祉のよりどころを示すとともに，その基本的なあるべき姿を宣言的に規定したものであって「老人憲章」とも称すべき条文である．高齢者の福祉を図るための国，地方公共団体の施策の運用に指針を与えるとともに，高齢者を含む一般国民の心構えについて指標を与えているものであるといわれる[15]．この規定がまさに「敬老」の考え方に通じる部分でもあろう．現在において，「敬老」という考えは，「軽老」に変貌しているようにも思われるが，時代が変わっても，常に「老いを敬う」という道徳意識は持ち続けるべきである．

2）「孝」思想

次に，「孝」思想があげられる．

「孝」とは，子が親によく仕えることである．それは，家族集団における基礎的な徳目である．

儒教では，社会の基本的な単位は「家」であり，なかでも特に親子関係は社会秩序全体の根底として位置づけられている．儒家にとり親子関係は人と人との秩序関係－人倫の根本であるので，「孝」は古くから重要な徳として高い評価を得てきた[16]．

「孝」思想の根拠は，主に「孝経」の中で述べられているが，伝統的な儒教社会では，子の親に対する「孝」は絶対的なものであり無条件であった．「孝」とは，父母を扶養し，愛敬を尽くすだけでなく，物心両面にわたる祖先の既得を守って子孫に伝え，家族を慈愛し，祖先の祭祀を絶やさず，君に忠に長上に従順なることであった．

しかし，近代に入り，儒教道徳の「孝」は，絶対服従的なものを保ちつつも，「恩」というものによって条件づけられるという構造へと変化し，昭和初期には「孝道」や祖先崇拝のような風習は衰弱していくことになった．

ところで，民法における道徳に関する規定に，

① 民法877条【扶養義務者】

「直系血族及び兄弟姉妹は，互に扶養をする義務がある」

② 民法730条【親族間の互助義務】

「直系血族及び同居の親族は，互に扶け合わなければならない」

とある．「孝」の意識が昔ほど絶対的なものでないにしろ，現在においても扶養義務は課されている．時代の変化に対応した，親子間の互助という形で家庭に道徳的な考え方を残したと考えることができよう．「敬老」と同様に道徳意識は常に持ち続けていく必要があると思われる．

3）「仁」思想

最後に「仁」の思想である．

高齢者に関する問題というのは，少なからず昔から生じていたと思われるが，現在においては特に大きく取り上げられている．戦後の「イエ制度」廃止後の家族機能の変貌による影響もその要因の一つと考えられる．そして，いまや高齢者問題は家族の手を離れ，地域社会全体の問題となり範囲も拡大されている．

今後は，少子高齢社会に合わせ，従来の血縁関係にとらわれない新しい家族・人間関係が今以上に模索されなければならないものと思われる．

そして，人々の意識の中に自然と受け入れられ，実践できるような，時代に見合った道徳思想が必要になるものと考えられる．それは，親と子のあたたかい感情を基礎にした考えである「敬老」や「孝」の思想に加え，血縁関係に薄い人々，あるいは血縁関係にない人々にまで及ぼした倫理，論語のいう「仁」の考えを用いた接し方が必要になってくるのではないかと思われる．

「仁」は言葉で簡単に言い表せないものであり，父母への親しみの感情から出発してそれを遠くに及ぼしていく，その毎日の営みの積み重ねが「仁」である．「仁」は，一歩一歩踏みしめて無限のかなたにまで進み行く可能性を持った営みである．

「論語」によれば，血縁を越えたところに成立する倫理である「仁」もまた，父母と子との間にある自然の情愛に基づくものであるから，社会は血縁関係を基にして成立することになる[17]．

江戸前期の儒者である伊藤仁斎の思想の中心は，その号にも見られるとおり「仁」である．「仁」は，儒教の中で古くから最高の徳目とされているものだが，仁斎の場合，それが君への忠や親への孝といった特定の

ものに集約することはなかった．君臣，親子，夫婦，朋友といったすべての人に対する「仁」つまり愛情と思いやりの心に基づく道徳の実践者こそ「仁者」であると説き，「仁」の必要性を強調する[18]．

この思いやりの心（人の心の傷しみのわかる心）こそ，孔子が必死に強調した「まごころと思いやり」（忠恕という言葉で表している）であり，「仁道」なのである．現代人の生活や教育に広い人間情操的な生き方（それは孔子の仁道，すなわち忠恕を育て広める生き方と同じである）が要望されている[19]．

自分を慈しむ心が，ひいては他人に対しても「仁」の徳目を施し，きめ細やかな人間社会を作っていくことにつながってくるだろう．

以上，高齢者福祉に必要とされる道徳思想については，「敬老」，「孝」に加えて，「仁」を取り上げた．今後，日々の福祉実践の中において，また，教育によってこうした道徳意識が強められるようになると，本当の意味での福祉が今以上に充実するものと思われる．

4．介護福祉教育における課題

1）道徳思想と福祉実践

まずは，福祉を展開する上で道徳の意識は必要であるということをふまえ，道徳思想と福祉実践が結びつくことの意義について考えてみたい．

道徳というのは，一つの人間の見方を作るものである．人間がどうなれば人格的であるか，というような問いがあった時に，一つの人間関係が本当の意味で人間的であるかというためには，どうしても道徳的な人格論が必要となってくる．なぜなら，人間というものは元々倫理的に具体的な活動をしており，その中で道徳論はその人柄をどう判断しようかという時に出てくるからである．よって，生活でも人格論的な道徳が必要であるので，当然，人間の活動の場である福祉実践の中においても意味を持ち，意義があるということになる．

例えば，具体的な現場としての施設の中においても，この観点がないと，結局施設活動のみならず，福祉実践自体にも欠落領域が出てくるものと思われる．こうしたことを補強，サポートするために道徳的な人格論が必要となってくるのである．

特に介護の現場で，日々最も利用者とかかわる時間が多い介護福祉士にとっては，確実に押さえておくべき事項であろう．実際の現場においても，老いを敬うということや思いやりの心を持つといった意識が弱いためか，常に自分中心に物事を考え，思うままに行動する学生が少なからず存在する．人として当たり前の基本ができてこそよりよい援助が実践できるものである．ここで，介護福祉教育のあり方を一度見直してみる必要があるのではないだろうか．

2）教育上の課題

道徳的な人格ということを考えたとき，人間はどのようにして自らの徳を形成しうるのか．どのようにすれば道徳的になれるのであろうか．

人間は，自由な存在として自らの徳を生み出し，それらの徳に対して責任を負うという事実をはっきりと自分の意志の目標として追求すべきである[20]．が，実際にはかなり難しいことである．そこにはやはり教育による道徳の強化が必要となってくる．

介護福祉教育上における課題を提示してみる．

一つ目は，現在，介護福祉を学ぶ対象学生が，道徳についての意識をどのくらい持っているのかを把握する必要がある．今までの生活環境等による影響も大きいと思われるが，将来，介護福祉を担って立つ学生の考えや想いを具体的に把握することにより，どの程度の意識の強化が必要であるか，教育を行う上での判断材料にもなってくる．

二つ目は，介護福祉士養成カリキュラムの中で，どの科目で教育をしていくかということである．現在では，教育の機会は特に設けられていないのが現状である．よって，多くの専門科目がある中で，今までに述べた道徳の考え方が反映されやすく，学生にとって実践と結びつきやすい科目の中で学ぶということが重要である．例えば，介護概論，介護技術，実習指導，老人福祉論といった科目があげられてくる．授業の中で，少しずつ意識の強化を行っていくべきであろう．どのように授業の中で展開していくかについても今後の検討課題である．

三つ目は，実践との結びつきである．

福祉教育は，今日の高齢社会を背景にして，高齢者福祉の推進とともにその有効な展開が求められている．ある子どもが，高齢者のしわのある手を見て，「おばあちゃんの手は汚い」と表現するような核家族化社会のなかで，子どもは高齢者と接する機会が少なく，高齢者の手のしわの意味するところを知らない状況となっている[21]．

そこで，学校で得た知識を福祉教育実践（介護実習やボランティア等）の中でいかせるようにしていく必要がある．特に高齢者との交流を通じて，人は老いて

心身の機能が衰え，やがて死んでいく存在であることを悟ったり，また，積極的に高齢者と接することによって，高齢者の持つ知識や経験を受け継いだり，その内容に意味のある交流を推進するべきであろう．

5．まとめ

本稿では，道徳的観点から高齢者福祉を考え，その上で今後の介護福祉教育における課題を取り上げてみた．現在の福祉の世界では，人と人とが直接かかわるときには，「人権論」で大体話がついているように思えるが，人間関係で動く人と人との人格的な関係は，人権論だけで語るわけにはいかない．

今後，福祉の分野ではより質の高い介護サービスが求められるようになってくるだろう．その根底には，「老いを敬う」，「親を孝行する」，「思いやりの心を持つ」といった道徳思想があり，いつもその意識を持ち続けられるようにしたいものである．

6．文　献

1）山口意友：女子大生のための倫理学読本，初版，福岡：葦書房，pp. 196—197，1993.
2）堀田　彰，片木　清編著：現代倫理学．第12版，京都：法律文化社，p. 1，1990.
3）金子晴勇：倫理学講義，第6版，東京：創文社，p. 14，1996.
4）佐藤俊夫：倫理学[新版]，第44版，東京：東京大学出版会，p. 6，1991.
5）堀田　彰，片木　清編著：現代倫理学，第12版，京都：法律文化社，p. 1，1990.
6）金子晴勇：倫理学講義，第6版，東京：創文社，pp. 16—17，1996.
7）杉上長造：教育勅語精解，初版，東京：文化書房，p. 347，1934.
8）佐藤俊夫：倫理学［新版］，第44版，東京：東京大学出版会，p. 9，1991.
9）金子晴勇：倫理学講義，第6版，東京：創文社，p. 37，1996.
10）佐藤俊夫：倫理学［新版］，第44版，東京：東京大学出版会，p. 168，1991.
11）三澤昭文監修：介護における人間理解，第1版，東京：中央法規，p. 235，1999.
12）金子晴勇：倫理学講義，第6版，東京：創文社，p. 17，1996.
13）竹内芳衛：敬老の科学，初版，奈良：天理時報社，p. 50，1942.
14）宮脇源次：ライブラリー総合福祉⑤老人の生活と福祉，初版，東京：学文社，p. 97，1983.
15）森　幹郎：老いとは何かー老い観の再発見，初版，京都：ミネルヴァ書房，pp. 37—38，1989.
16）田中麻紗巳：儒教思想のキーワード　儒教思想の本，第1版，東京：学研，p. 110，2001.
17）岡本光生：図解「論語」の知恵を身につける本，第1版，東京：中経出版，pp. 70—71，1999.
18）中村春作：儒者の言葉　儒教の本，第1版，東京：学研，pp. 216—217，2001.
19）内野熊一郎，西村文夫，鈴木總一編著：孔子　人と思想2，第23版，東京：清水書院，p. 77，1994.
20）Bollnow O F：徳の現象学，森田　孝訳，初版，東京：白水社，p. 30，1983.
21）三澤昭文監修：介護における人間理解，第1版，東京：中央法規，p. 237，1999.